

三枝 世界で一番古い高分子専門のジャーナルが日本で出たというのは、われわれ大いに誇りにしていると思います。今までそういうお話をあまり聞いておりませんので、今の桜田先生のお話をおうかがいして、先輩のお仕事を大いに誇りにしたいと思う次第です。

その後、この「高分子化学」は、「高分子論文集」に変わりましたが、その辺のいきさつにつきまして、神原先生、お話しいただきたいと思いますが。

神原 だんだん高分子学会の会員

がいろんな範囲に広くなりまして…。高分子工業の連中、あるいは高分子物理を勉強している、あるいは高分子材料を医学的に、医療材料として使うような、広い、ちがう立場の方が会員に入ってきて、そういうような分科会的な研究会なども高分子学会の中に、いろいろできた。そういう方が自分たちの研究を投稿する雑誌として高分子化学だけにとらわれないほうがいいんだという声もあり、私が会長の時に、この名前に替えたわけです。

ポリマージャーナルの創刊と発展

1) 高分子学会の歴史 30 年のほぼ中央に位置するのが、1966 年の IUPAC シンポジウムと 1970 年の Polymer Journal の創刊とである。後者でもポリマー・雑誌の 2 語を新鮮にもこの順に並べたり、紺碧に白抜きで太目の活字を表紙に置いてみたり、正に軒昂たる当時の意気が感じられる。競争相手の一つ、雑誌 Polymer (英, Butterworth 社) の主筆 C. H. Bamford 教授からは「続けば結構」と皮肉られましたが、今日ではすでに 14 巻を数えて十二支も一巡し、世界的に定着しえたことは誠に同慶の至り。

2) 高分子学会では故島内教授とともに欧文誌発行準備委員会が作られ、粗案が練られた。その時の賛否両論は「欧文誌の意義」と題して高分子 (18, 237, 1969) の素描で述べた。

数少ない学会発行誌としての高いレベルの論文と、十分な経済的な裏づけが常に得られるかどうか大いに心配であった。すでに雑誌の数も多く、在日外国人の中で欧文審査に適当な人は得難いだろうし、今さら欧文で

もあるまいという国粋論やら、学会としての邦文誌尊重論もなくはなかった。しかし国際的な研究推進という大義名分はあり、審査が日本語で日本式にやれるという内々のメリットや、発刊までの所要日数が従来の半分くらいには短縮できそうなどいろいろの魅力もあった。

3) 新雑誌投稿用 Key words の作り方が中條教授 (高分子, 18, 444, 1969) によって紹介された。その後の研究人口の増加が加わり、今日では ACS 発行の Macromolecules と肩を並べる国際誌にまで成長した。これからはとくに論文審査の詳細な過程などで、もしかりに従来の欧米に源をもつ還元・細分的な科学方法論に加えて、総合、全体子論的な東洋的方法論が加味される傾向にでもなるとすれば、わが国での国際誌発行にまた一つの新しい意義が加わることになるであろう。国際的にも特徴のある Polymer Journal の発展が待望される。

岡村誠三 (京都大学名誉教授・京都産業大学理学部教授・日本原子力研究所客員研究員)

三枝 それから、研究のジャーナルといたしまして、高分子学会には、もう一つの欧文誌「Polymer Journal」がございます。これが創刊された時期に岩倉先生がエディターとしていろいろご尽力ただいておりましたが、お話しただけかもしれません。

岩倉 国際高分子シンポジウムが 1966 年 (昭 41 年)、日本で開催されたのを契機にして日本の高分子科学というのは、ずいぶん国の内外で認められるようになりまして、研究者層も厚くなって日本人の研究論文が、日本語の雑誌だけでなく、欧米の雑誌にずいぶん投稿されるようになっていったわけです。その趨勢を、その頃国の内外で活躍されていた岡村先生が一番よく存じておられて、日本にも当然、高分子学会に「Polymer Journal」のようなものの刊行が必要であるというご意見を強くお持ちになり、そのために非常に一所懸命発刊について推進努力していただきました。

神原 当時学会もかなり財政的に苦勞しておりました。文部省の補助金が得られるということも非常に魅力であって、それもこれの発刊に踏み切った大きな一つの要素だと思ふ。

中島 準備委員会の時に雑誌の名前をどうつけようということで、ずいぶんたくさんのお名前があげられたんですけども、結論的に阪大の藤田博さんの出された「Polymer Journal」に落ちつきました。

高彦 会誌の創刊号に掲載されている設立趣旨の細則の 10 条に、「欧文及び邦文の論文集を毎年数回これを発行する」と、こう書いてあります。

官学民協同の伝統

三枝 高分子学会の仕事として